

名古屋日泰寺・伊勢湾台風遺構見学印象記

(株)畑村創造工学研究所

代表 畑村洋太郎

- 見学日 : 2016年2月26日(金)
- 見学場所 : 日泰寺, 伊勢湾台風遺構
- 見学内容 : 日泰寺 関東大震災慰霊堂
 橘宗一慰霊碑(甘粕事件の犠牲者)
 名古屋市港防災センター(伊勢湾台風関連展示)
 浸水位標識(南消防署大同出張所)
 愛と力の筏像(大同高校)
 伊勢湾台風殉難者慰霊像(柴田町内会館)
 伊勢湾台風殉難者追悼碑(大泉寺内)
 くつ塚(伊勢湾台風殉難者慰霊碑)(浜田南公園)
- 手配・案内 : 名古屋大学減災連携研究センター エネルギー防災寄付研究部門
 教授 武村雅之氏 他
- 同行者 : (株)畑村創造工学研究所 研究統括 手塚則雄
- 記録 : 2016年5月8日～5月18日
- 行程 : 2016年2月26日(金)
- | | |
|-------------|--|
| 09:30 | 名古屋観光ホテル発 |
| 10:00 | 日泰寺本堂(日泰寺の由來說明, 本堂参拝) |
| 10:30 | 関東大震災慰霊堂(慰霊堂説明, 奉安塔参拝) |
| 11:30 | 橘宗一慰霊碑(甘粕事件の犠牲者) |
| 12:00 | 震災慰霊碑 |
| 12:00～13:00 | 昼食(自由が丘駅前)@仁王寿司 |
| 13:30～15:10 | 名古屋市港防災センター(伊勢湾台風関連展示) |
| 15:30 | 浸水位標識(南消防署大同出張所)・
愛と力の筏像(大同高校)
伊勢湾台風殉難者慰霊像(柴田町内会館) |
| 16:00 | 伊勢湾台風殉難者追悼碑(大泉寺内) |
| 16:20 | くつ塚(伊勢湾台風殉難者慰霊碑)(浜田南公園) |
| 17:22 | 名古屋駅発 19:03 東京駅着 (のぞみ176号) |

○はじめに

今回の見学で最初に訪問した日泰寺は 19 世紀に発見された釈迦の骨の寄贈をもとに建立された寺で、今も名古屋にある各宗派の持ち回りで継続的に運営されている。ここには関東大震災慰霊堂や関東大震災惨死者供養塔があった（図 1， 2）。



2011 年の東日本大震災の後、津波災害をどう後世に伝えるかが問題とされ、遺構の保存が各地で議論されている。その結果、何らかの保存策がとられているものもあるが、消えてなくなるものもある。

今回の見学では 5000 人ものが亡くなった伊勢湾台風(1959 年)が現在の社会にどのように伝わり、共有されているのかを実見した（図 3）。それをもとに 3 か月近く考えた。

その結果を以下に記す。

○遺構保持の工夫

伊勢湾台風による高潮で水没した場所に行ってみた（名古屋市南区柴田町）。この町内だけで 1000 人ものが亡くなった。全体では 5000 人ものが亡くなっているので、全死者の 1/5 がこの町で亡くなったのである。その全部の人の氏名が伊勢湾台風殉難者慰霊像の横にある石碑の

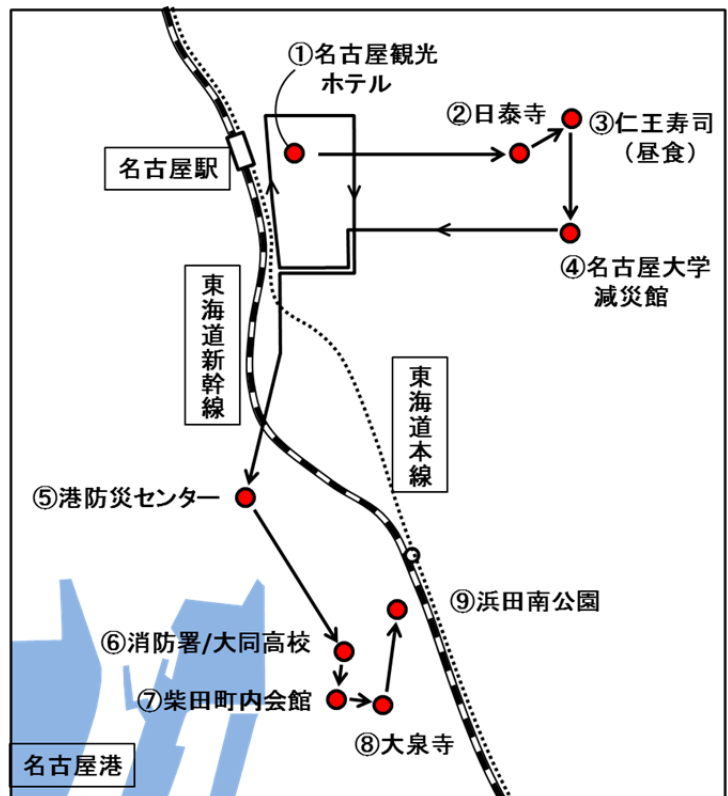


図3 名古屋日泰寺・伊勢湾台風遺構視察工程

裏面に刻まれていた(図4)。石に刻んでおけば半永久的に亡くなった人の名前を伝えることができると考えたのであろう。

石碑には、いつ・どこで・どんなことが起こり、何人が亡くなったか、後々の人はそのことを日々の判断・行動の中に斟酌(しんしゃく)して欲しい、と書いてある。自分達の経験したことを石碑に記すことにより、同じ空間(石碑のある地点)に別の時間(何十年か何百年か後の時間)に存在する人に伝えようとしているのである。

石碑に刻んだ文字は凹み

具合で判別するだけなので、とても見にくい。そこで凹み部に白い塗料を塗ったり、黒い墨を塗ったりする工夫をしている例がある。大阪・淀川の津波来襲の石碑は後者の例で、定期的な墨の塗り直しを地域の行事とするよう促した文面が刻まれているところが心憎い。この定期的な行事開催の指示は単なる作業指示ではなく、石碑の碑面の保持のための活動を通じて地域のあり方を示唆していると考えるべきで、とてもユニークである。

災害遺構ではないが、地域の人々を守る構築物の維持を行事化することによって実現しようとした例として、武田信玄の信玄堤がある。武田信玄は堤の保持のため、地域の祭りが土堤の上を通ることを指示し、しかも祭を差配する家を定め、免税としたという。信玄は単に行事の指示をするだけでなく、経済行為として継続可能となるような制度を作っていたのである。

○三河地震の伝承

名古屋大学・減災連携研究センター「防災アカデミー」での講演(2月25日)と名古屋地区の災害遺跡めぐり(2月26日)のすぐ後(3月1日)にデンソーの安城工場と西尾工場を見学した。安城工場ではオルタネータ(モータのようなもの)、西尾工場ではラジエータを作っているところを見せてもらい、自分では思いもしない作り方や構造にひどく驚くとともに、そういう会社が育ってきたこの土地の風土に関心を持った。デンソーは今や年間売上が4兆円を超え、世界第2位の自動車部品メーカーに成長している。

帰京後、今回の見学で武村さんからもらった資料を見て驚いた。太平洋戦争末期の1945年1月13日に三河地方に直下形地震があり、4000人近くの人が亡くなる大被害があったことが書いてあった。この地震があったことは戦意高揚・維持のため報道されず、記録も殆ど残っていないということである。しかも被害が大きかったのが安城地区と西尾地区で、それぞれ1000人近くの人が亡くなったと記してあった。



図4 伊勢湾台風殉難者慰霊像と殉難者の名前の石碑(名古屋市南区柴田町)

戦争末期にはこの三河地震とともに 1944 年 12 月 7 日には昭和東南海地震（これは三重県の紀北町の津波避難タワーの見学で知った）もあったとのことである。これだけの大災害を半年のうちに 2 つも経験した地なのに、夕食の懇談の時を含めてデンソーの見学中には「三河地震」の話も「昭和東南海地震」の話も一度も聞くことはなかったし、自分も全く知らなかった。

この印象記を書こうといろいろと考えていた 4 月 14 日に震度 7 の熊本地震が起った。テレビや新聞で報じられる映像は三河地震の僅かに残された写真と瓜二つであった。家の屋根の形はそのまま屋根の下の空間が潰れている。この潰れた屋根の下から助けを求める人の声が聞こえてくるような気がする。

○災害記憶の伝承の目的

いったい災害記憶の伝承は何を目標としているのだろうか？ そこに生きている人間が災害があったことを知っている状態を作り出したいのだろうか？ それとも同じ状況になったときにどう対処すべきかを伝えたいのだろうか？ そもそも災害で命を落とさないようにさせたいのだろうか？ また災害が発生しないようにさせたいのだろうか？

○伝えれば伝わるか？

ともあれ、伝えたい中身があるから伝えようとする訳であるが、ここで大きな疑問が生じる。すなわち「伝えれば伝わるか？」である。

「伝わる」とはどんなことだろうか？ 単純に伝える動作をやっても伝わらないことは日頃良く経験する。「伝えても伝わらない」のである。それでは伝わった状態とはどんな状態を指すのだろうか？ 伝わった状態とは、伝えようとする人が頭の中に持っている概念と同じ概念が伝えられた人の頭の中に発生した状態のことを指すのだろうと思う。するととても大事なことがわかる。いくら一生懸命伝えようと努力しても、“伝承”そのものの認知的、または脳科学的なメカニズムの理解なしには結果としての伝承（正しくは伝達）は起こらない。

伝承したいと考えている内容を受け取る人（いまここで「受承人」ということにする）に伝えるメカニズムを考えてみよう。受承人は伝えられた内容がそのとき持っている参照心象（記憶のテンプレート）と合致したときにはじめて「わかった」と思ったり、自分の判断の基準になったりするのである(*1)。人が何かの参照心象（記憶のテンプレート）を捜すのは常に上からで(*2)、それは人間の記憶は古いものが下に沈み、新しいものは順番にそれらの上に積み重ねられてゆくからである。

(*1) 山鳥重著「「わかる」とはどういうことか—認識の脳科学」筑摩書房新書

(*2) 松本元著「愛は脳を活性化する」岩波書店

では、この記憶のテンプレートとしての参照心象はどのようにして形づくられ、頭の中に定着して蓄えられるのだろうか？ 多分、主なルートは 2 つあり、一つは「衝撃」、もう一つは「繰り返し」なのではあるまいか？ 人間はそれまでに出会ったことがなく、自分の命にかかわることに遭遇すると、この衝撃ルートでテンプレートが作られ保存される。もうひとつのルートである繰り返しによるルートでは、参照心象になるべき同一の心象が繰り返して送り込まれているといつの間にか、参照心象が形成され保存されるのではないだろうか？

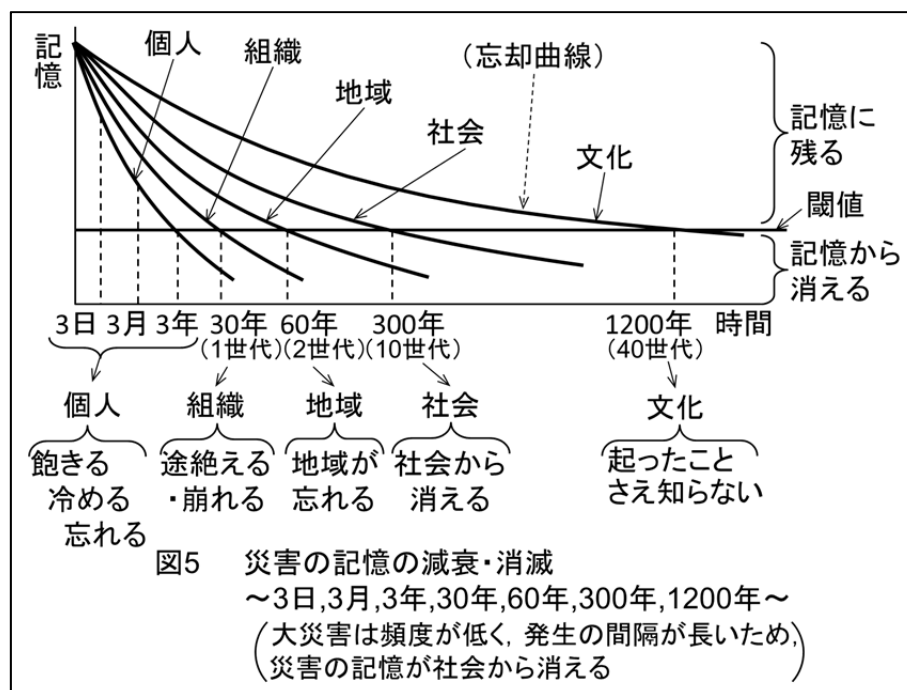
一方、単に頭の中の記憶装置の中にことからの羅列としてのデータ（ここでは「単なる知識」と呼ぶ）が入っていても、探索されたときに合致したと認識されることはない。合致が認識されなければ“ない”のと同じである。

テンプレートの形成がこの衝撃と繰り返しの2つのルートによるとすると災害記憶の伝承の方法の意味がよくわかる。起震車による震動体感や津波来襲映像や高潮来襲のCG（コンピュータ・グラフィクス）映写はこの衝撃によるものであり、伝承館での展示や書籍の出版などは繰り返しによるものだろう。

それでは石碑はどうだろうか？ ここで考えた一人の人間の記憶のメカニズムを超越した伝達を目指しているように見える。気が付く者がいれば知って欲しい、誰も気づかなければそれも仕方がない、とにかく今できることを何かしておかないと後で気づいた人にとって何のよすがもないことになる、それはあまりに口惜しいというので建てられるのではあるまいか。

○忘却曲線

一人一人の頭の中に書き込まれた記憶は時間の経過とともに減衰してしまう。忘却曲線によれば、個人の記憶は3年で、組織の記憶は30年で、地域の記憶は60年で、社会の記憶は300年で消えてしまうと考えられる（図5）。「いや、そんなことはない。災害の記憶は鮮烈で、もっと長持ちする。」と言いたくなるが、平均的に見れば上述の通りだろう。



この忘却曲線に逆らって災害のことを後世に伝えようとするのが石碑である。重大な災害が起こってしばらくすると、その時に起こったことや考えたことを文字にして後世に伝えたいとなり、石碑を作る。石碑の文面に記した内容はその時点でピン止めされ、その内容はその後時間が経過しても変わらない。

伊勢湾台風で高潮がどこまで来たかを現地で見たいと思っていたが、今回の実見ツアーではただ一ヶ所だけ、南消防署大同出張所に表示があった（図6）。壁面の自分の頭よりずっと上の

位置にここまで水没したと記してあった。

石碑に記すのもいいが、街中の電柱や堅固な建物の壁面に海拔と被災時の水位を表示するのはものすごく効果があるのではないだろうか。そういえば伊勢湾台風から10数年経ってから名古屋に来たとき、街中の電柱に来襲した高潮高さの表示があり感心した記憶がある。60年近く経った今、ほとんどそれが見られない。地域の記憶も忘却曲線に沿っているのだろうか。

○記憶の風化防止への小生の具体的提案

私は昔からきのこの形の津波シェルターを提案してきた(図7)。きのこ形津波シェルターとは、太い中心の芯柱の上に円板状のテラスが載っており、芯柱の周囲には2条のらせん階段が付いているものである。こんな形をしたシェルターを海岸線に沿って何100mおきに1基の割合で建設する。



図6 南消防署大同出張所にある伊勢湾台風最高浸水位標識

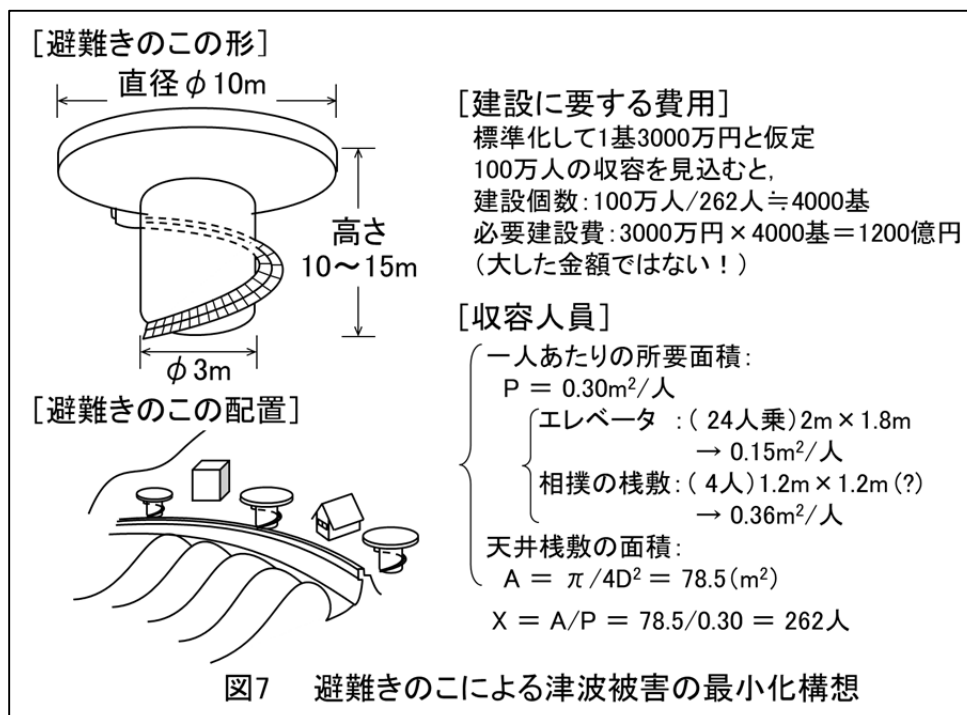


図7 避難きのこによる津波被害の最小化構想

しかし、このシェルターの特徴はその外形にあるのではなく、運用を学校行事と組み合わせ、避難行動がすべての住民の頭の中に刷り込まれた状態を作り出すことにある。

地域の小・中学校で年1回の運動会の際に必ずパン食い競争を行い、全生徒が参加する。パン食い競争のパンはテラスの上に張った紐に吊るす。学校の校庭を出発しパンをくわえて(パ

ンは途中から手に持ってもかまわない) 校庭に戻る。

このように運動会とシェルターへの避難行動とを組合せて行えば、地域の住民は一生のうちに小学校と中学校で合計 9 回はシェルターに上ることになる。世代交代があっても“昔、お父さんの子どもの頃にやったことがあるヨ”とか“今でもくわえたパンのにおいを覚えているヨ”という経験の共有で、すべての地域住民の頭の中にシェルターの存在が生活と一体化して刷りこまれ、しかも時が経っても廃れたり風化することはない。

この組み合わせの妙は信玄堤と祭の組み合わせから着想を得たものであるが、とかく風化しやすい避難施設の日常生活への取り込みには有用なのではあるまいか？

○おわりに

今回見学をして、改めて災害が起こったこと・被害の内容・その時の人々の対応などの事実の知識の共有と日々の行動や判断への寄与を実現することが大事だと痛感した。

そのためには人々の日々の生活の継続の根幹に関わる情報・知識が忘れられ、無関心の世界に放置され、やがて何もなかったことになるメカニズムを明らかにする必要があるのではないだろうか？

○武村さんへの謝辞

名古屋の災害遺跡をご案内戴きありがとうございました。その時に感じたこと・その後に考えたことをダラダラと記してみました。見学の折にお約束した感想文ができましたのでお送りします。ここで考えたことなどをお話する機会を楽しみにしています。ありがとうございました。

以上